いうことだと思います。それぞれの帰属意識がダッカという場で築かれることによって、今度は、いい意味での村とのつながりはどうなるのかが気になります。確かに洪水という問題もありますが、平地続きの利点を活かして、道のインフラ整備がなされると、農村と都市を便利に移動できる国になると思います。

阿部　都市と農村の健全なつながりを強化することが大切ということでしょうか。

南出　そういう意味では、中心化より、雇用機会や教育がもっと地方に分散されるというのもひとつの手だと思います。一方で、ダッカの都市文化を誰がどのような文脈で作るか、ですよね。確かにゴミ問題は典型的で、ダッカでは目に見えて深刻です。都市に住むには、都市に住むための秩序が必要だと感じます。

村松　教育の中に読み書きそろばんのみならず、都市でどのようにして生きるかという智恵を教えるべきでしょうね。わたしはそれらを「都市リテラシー」と呼んでいます。

阿部　都市では「都市リテラシー」をその担い手とともに育ててゆく。一方で農村はどうなるでしょう。

南出　農村では、たとえば今（2月）だと季節の年中行事が残っています。そうした農村文化の価値が薄れていくのは残念です。今、農村での仕事というと、学校の先生かNGO職員ぐらいですから。

東城　学校の先生と末端のNGO職員は、あこがれの職種では決してないですね。給料は学校の先生もNGO職員も安いです。NGOはインターナショナルな上層部のほうは華やかですが、下のほうは地味で大変な仕事です。

南出　日本の田舎の農村では、限界集落と呼ばれる場所が多くあります。バングラデシュがそうならない道もおそらくあるだろうと思います。

阿部　農村が魅力的でないと、都市も魅力的にならないのかもしれません。都市と農村を切り離して考えてはだめでしょうね。

都市の定義によって異なりますが、ここ数年の間に人類史上初めて、都市に住む人口が農村に住む人口を上回ったといいます。農村人口は微減するそうですから、世界的には、都市で生まれて都市で死ぬ人がどんどん増えることになります。これからいかに都市で暮らすか、ルールというか規範がますます重要な時代に入りました。都市への帰属意識にもとづく都市リテラシーの形成。それは公共性と環境問題への関心を生みます。今回のダッカは、その歴史を反映して、「都市リテラシー」の必要性がとりわけ強く感じられる都市だったようです。

謝辞

このたびの調査では下記の方々にお世話になりました。厚く御礼申し上げます。

A.K.M. Aminul Islam さん（Deploy secretary and zonal executive officer, Dhaka City Corporation）

A.K.M. Mojibur Rahmar さん（MBBS(Dhaka), MCPS (Medicine), Shahid Suharawady Hospital）

Babul Nokrek さん（Sub-Editor, The Daily Star）

Muhammad Abdur Razzaque さん（Minister, Ministry of Food and Disaster Management）

Akku Chowdhury さん（Trustee, Liberation War Museum）

Monica Chowdhury さん（Art Director）

Keshab Chakrabaty さん（Sr.Teacher）

Pranjal Nakrek さん（Student, South Asia University）

リレーエッセイ：新しい学問への道

公共民俗学の創造に向けて
フィールドにおける実践の「ひとつ」のかたち

私はいま、研究者が立場性を乗り越え、社会で実践する「新しい野の学問」としての民俗学＝公共民俗学という課題に取り組んでいる。紙幅の都合で、その学が起こってきた背景を詳しく述べることはできないが、代わりに私がフィールドで試みている「公共民俗学」的な実践アプローチに関して概説したい。

菅　豊
Yutaka SUGA

1963年長崎市生まれ。東京大学東洋文化研究所教授。日本と中国をフィールドに、地域社会の自然／文化資源管理論や公共民俗学の創成に関する研究をおこなっている。著書に『川は誰のものか――人と環境の民俗学』（吉川弘文館、2006年）、編著に『人と動物の日本史3――動物と現代社会』（吉川弘文館、2009年）。

フィールドが震災に見舞われる

公共民俗学――それは、公共と名のつく他の学問、また他の学問によってなされる応用や実践とは、いささか異なる位相に存在している。そして、それは私にとっては紛れもなく「フィールド・ワーク研究」なのであるが、私を知る同業者からは、それは奇異のまなざしで見つめられている。

私は、いま新潟県小千谷市東山地区に、1頭の角突き牛（闘牛）をもっている。そこに、私は10年ほど前からフィールド・ワークに訪れていた。当初は、人と動物の関係史を民俗学的に描こうという至って研究者らしい動機で、そして研究者らしい立ち位置でインタビュー調査や資料調査をおこなっていた。しかし、ある大きな出来事をきっかけに、私のフィールド・ワークは、その方向性を大きく変えたのである。

新潟県小千谷市東山地区。2004年10月23日、マグニチュード6.8の直下型大地震がこの地を襲った。震源域であるこの地区では多くの家屋と財産が失われ、尊い人命が奪われた。そして、国指定重要無形民俗文化財にもなっている角突き牛の多くが被害を受けた。倒壊した牛舎の下敷きになって命を失った牛。救出されたものの、二度と立ち上がれなかった牛（写真1）。まさに家族同然に育てていた牛の死は、家族の死とかわらない悲し

写真1　救出された横綱牛・二代小金石。その後、二度と立つことのなかったその名牛からは赤い涙が流れていた（2004年11月、筆者撮影）

写真2　仮設闘牛場の建設。闘牛振興協議会会員が機材をもちより自分たちで作りあげた（2005年5月、筆者撮影）

みをこの地の人びとにもたらした。

山奥の集落では緊急避難する際、牛たちを泣く泣く置き去りにしてきた。しかし、牛の飼育者たちは、避難所に待避させられても牛たちのことを忘れることはなかった。彼らは余震が続くなか、意を決して壊滅的打撃を受けた危険な山中に舞い戻り、命がけで牛たちを救出したのである。翌春、彼らは、まだ仮設住宅で生活するなか、仮設の闘牛場を自分たちの手でこしらえ、角突きを再開した（写真2）。そして、ついに念願であった故郷・東山での角突きの復活を果たした。

角突きを続けるために、東山に戻る年寄りがいた。全壊した自分の家を再建する前に、牛舎の心配をする若者がいた。この地において角突きは、人びとが再びそこで生き続けるための大きな理由と原動力になったのである。そして、この地の住民は、地域復興の原点として、自発的、自立的に角突きを活用したのである。

外部から押し寄せる専門家

このような災害に立ち会った私は、当然、反射的にこの地域のために「何かできることはないか」と意気込んだ。見舞金配り、募金集め、支援のためのシンポジウム…被災者に親しい友人としての立場から実践に取り組んだが、それはあくまで「一般的」なもの。私は、自身がもつ専門性と技能を基盤とした実践を再思三考したが、しかし、何もできなかった。それは当然のことといえばあまりにも当然のことであった。実践をおこなうには、その実践の技術論を積み重ねる必要がある。しかし、私が専門とする民俗学は、アカデミズム化する過程で社会実践というものを切り捨ててしまっており、実践の技術論に関しては目立った知見をもってこなかったのである。結局は、しばらくの間、自覚的に文化を原点として復興に取り組む人びとと、その復興過程を、私は眺めるしかなかったのである。

しかし、そのような過程に寄り添うなかで、私のフィールド・ワークは大きく転回した。私はあるときから、角突きを運営する小千谷闘牛振興協議会に入れてもらい、調査ノートとICレコーダーとカメラを捨てて勢子として闘牛場に立ち、そして自分の牛をもつようになったのである。それは、単に文化を細かく理解する手段としての参与観察ではない。

地震前には、この地区には、「研究者」という立場をもった人間は私しかいなかった。しかし、地震後、多くの研究者やNPO、政府系外郭団体のコンサルタント法人などの専門家が雨後の竹の子のように現れてきた。それらは、角突きを中核とする地域復興を支援するために地域に介入し、角突き復興や地域復興に大いに貢献した。しかし、その介入のすべてがうまくいったわけではない。実践に先走る研究者のなかには、地域住民の幸福に資することを実践の目標として表看板に掲げながら、その実、自らの研究活動の実験台として地域や文化の担い手を消費するものもいる。また、復興のために用立てられた基金を、復興事業を設計することによって、うまく吸い取ろうとする海千山千の専門家もいる。

このような社会実践のアクターは、社会のさまざまな制度を熟知し、それを使いこなす技術を独占的にもっている。簡単にいえば、補助金の所在や、その取得方法、プランニングなどに関する専門技術は、特定の専門家たちの手中にある。つまり、そのような復興のための資源へアクセスする知識と技術は、社会のなかで偏在しているのである。そのため、そのような専門家に、地元住民は依存するほか手立てがなかった、あるいは手立てがないと「思い込まされていた」のである。

公共民俗学的ふるまい方

あるコンサルタントは、夢のような復興事業の青写真を描いては、その過程で現地に落ちるはずの基金や補助金の一部をコミッションとして得ていた。そのコンサルタントにしてみれば、事業を拡大すればするほど、コミッションが増える。そのため地域住民の希望をできるだけ吸い上げるという名目で、事業を拡大させた。その結果、地元負担の割合も拡大することになる。基本的に補助金や基金は、事業費の一部を受益者負担にしているのである。

そういう「からくり」に地元住民は、少しずつ気がつき始める。いや、もともと気がついていたのであるが、そのようなからくりに組み込まれないと、自らの目指す角突き復興、そして生活復興に不可欠な資金援助を受けることができなかったため、言わず語らずにいただけなのである。しかし、彼らは、コンサルタントによって事業費のかなりの部分がさまざまなかたちで吸い上げられること、そして、自己負担が想像していたより膨らむことに、さすがに目を瞑ることができなくなった。結果、地元住民は、そのような外部アクターへの依存をとりあえず止め、身の丈にあった事業計画を自ら実現させる方向性を模索した。

このような状況下で、私はどうふるまったのだろうか。私は、このような「からくり」に巻き込まれていること、そして地元住民も与していることへの意見を表明した。ただし、意見を表明するといっても、普通の研究者がやるような、その問題点を声高に、理路整然と並べ立てるような表明はしなかった。いや、できなかった。先に述べたように、そのようなからくりは、地元住民にとっては至緊至要の仕組みであった。そのようななかで、違和感を感じつつもそのからくりに組み込まれることを余儀なくされた彼ら彼女らに、単純に「正論」という外部的価値を正面からぶつけることは躊躇されたのである。

私の意見表明といえば、インフォーマルな場でのつぶやきといった程度のものである。それは、角突き仲間と一緒にいるとき、たとえば角突き後の宴の場（写真3）。そういう日常の場で、そういう話題になったときに、ダイアログのなかで自分の意見をつぶやくことであった。それは、「相手はいま話題の国交省系の社団法人、いわゆる天下り団体だぞ」、「そんなに夢広げて後がたいへんじゃないか？」、「それはこの土地でやってきたことと違うんじゃないか？」といった臆見でしかない。

また、「先生はどう思う？」と、何気なく意見を求められた際に答えること。その質問は、本気で私に解決策や対応策を求めているのではなく、会話のなかでただ私に振っただけに過ぎないような質問。それに答える。このようなインフォーマルな日常会話のなかでの意見表明は、たぶん、角突き復興の役にはほとんどたっていないのだろうけれども、ときに僅かながらも無意識に汲みあげられることがあったのである。

地域における私の「役割」

もちろん、私も角突きを支える振興会のメンバーであり、そのような組織の公式会合で意見を述べる

写真3　角突き後の語らいの場。角突きの余韻に浸りながら、みんながいろいろな言葉を紡いでいく言語空間。そこでは肩肘張らない素直な意見が飛び交う（2008年7月、古澤拓郎氏撮影）

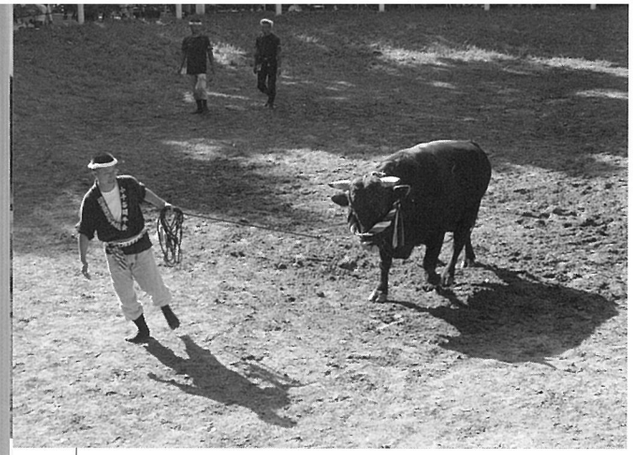

写真4　筆者と愛牛・天神号。角突き後には善戦した牛を褒め称えるために闘牛場内を引き回しする（2010年9月、施愛東氏撮影）

ことができる。親しい役員に働きかけることもできる。しかし、そのようなフォーマルな場では、私は発言できなかった。それは、私に染みついている「大学の先生」という権威性が、公式の話し合いの場では自然と権威的に作用してしまうことを自覚していたからである。普通の角突きの仲間は、普段から自己の意見をことさら人前で声高に主張することはない。むしろ、日常の場における多声的なダイアログによって現実が創られているのである。フォーマルな場は、その積み重なりの一地点でしかない。そういう日常でのかかわりと意見表明が、この土地の仲間がやっている在地的で伝統的、そして意識化されないネゴシエーションの普通のあり方なのであり、私もそれにしたがっただけなのである。

このようなインフォーマルなつぶやき以外にも、基金獲得のための陳情書作りやマスコミへの露出など、「大学の先生」の立場―肩書き―を使った仕事に、時折私は使ってもらうようになった。しかし、役割というものは、なにも私にだけ特別にあるのではない。また、私の方からことさら売り込んで得た役割でもない。私がみんなと同じく普通に角突きをしているなかで、地域の人びとが私を理解し、使えると「発見」した私の役割なのである。実は、角突きの仲間は、みんなが個性的な才能や立場をもっている。あるトウチャンはとても器用で、闘牛場の整備のときに重宝されている。またあるトウチャンは声が通るので、闘牛はやらなくとも闘牛アナウンサーとして活躍する。また、あるカアチャンは書道の達人で、ご祝儀の掲示を書く際に欠かせない。そういう地域の人びとの多様な才能と役割のなかに、新しい選択肢の「ひとつ」として、私は付け加えられただけに過ぎないのである。

順応的で再帰的な実践論

私自身はよそ者で、どうやっても地元の人びととは同じ立場にはなれない。どんなに地域に長くつきあっても、地域の人びととの完全な同一化はなしえないであろう。また、安易に同一化できたなどと思わない方がよい。しかし、角突きを通じて漸近線的――どこまで近づいても一致することはない――に接近することにより、ともに学び、ともに考え、ともに感じ、ともに楽しむことが少しずつできるようになった（写真4）。そして、少しずつ私の能力を活かせる役割と居場所をもらえるようになった。

角突きへの私の参画は、研究者という自己が、向き合う人びとと一緒に共感、共愉、共苦し、自己の行為を見つめ直しながら、ともに文化を継承し創造する再帰的な公共民俗学研究なのである。それは、一生を賭けたかかわりのもと、定型化せず、規範化せず、マニュアル化せず、汎用化せず、手段化せず、さらにその実践自体をアプリオリに目的化しない実践の民俗学なのである。

たぶん、いま東日本大震災に見舞われた地を多くの研究者が訪れ、さまざまな実践と研究をおこなっていることだろう。そういう場に立ち会うとき、地域の人びとの考え方や作法や価値観を十分に理解しなければならないことは当たり前として、さらに自らの行為が、彼ら彼女らに与える影響を自己モニタリングし、それを実践と研究にフィードバックする順応的で再帰的な姿勢が求められる。それは、けっして公共民俗学だけにとどまらない実践者の姿勢といえよう。

研究レポート・変化を読む 1

「アラブの春」を読み直す

飯塚正人
Masato IIZUKA

1960年神奈川県生まれ。東京大学大学院博士課程中退。東京外国語大学アジア・アフリカ言語文化研究所教授。文学修士。専攻はイスラーム学・中東地域研究。著書に『現代イスラーム思想の源流』（山川出版社）、共編著に『イスラーム世界がよくわかるQ&A100　人々の暮らし・経済・社会』（亜紀書房）、共著に『〈アラブ大変動〉を読む――民衆革命のゆくえ』（東京外国語大学出版会）など多数。

2011年初頭、チュニジア全土に突如燃え広がった反政府デモと民衆蜂起により、23年間続いたベン・アリ政権が倒れると、同種の抗議行動は一気にアラブ十数カ国に拡大し、エジプトでは30年に及ぶムバラク支配、リビアでも42年にわたるカダフィの恐怖政治に終止符が打たれた。未曾有というよりほかのない、こうした大変動はいかにして可能になったのか。また何が変わって、何が変わらなかったのか。今後の課題を含め、「アラブの春」を読み返す。

1 民衆蜂起を阻んできた監視と暴力

あまり知られていない事実かと思うが、アラブには不正や横暴に抗議して民衆が立ち上がり、時に武力に訴えてでも権力者を追い出してきた歴史がある。19世紀から20世紀前半にかけて多くの地域がヨーロッパ列強の支配を受けるまでは、戸籍の整備も不十分で、権力の側が統治下にある人びとの実数すらきちんと把握できなかったこともあり、エジプトでもシリアでも民衆蜂起が繰り返された。

しかるに20世紀半ば、「腐敗した王政の打倒」を掲げて軍事独裁政権を樹立したエジプトなどのアラブ民族主義陣営とサウジアラビアを中心とする王政諸国の対立が激化すると、大半のアラブ諸国では社会のあらゆる場所に諜報機関の監視の目が張り巡らされ、政府に従順でない市民を拘留・投獄して弾圧するという手口が広まっていく。結果として民衆の抗議行動は分断され、少数が決起しても強力な治安部隊に鎮圧されて、長期にわたる軍事独裁や警察国家の存続を許してきた。

チュニジアにおける若者の失業率が30～40パーセントにも及ぶこと、過去30年で人口がほぼ倍増したエジプトも似たような状況にあること、さらに2010年だけで国際食糧価格が36パーセントも上昇した結果、貧困層がいよいよ困窮しつつある一方で、不正蓄財によって巨万の富を築いている――と誰もが知っている――権力者の一族と取り巻きが、アラブ民衆の琴線に触れるパレスチナ問題には真剣に向き合おうとしないこと。こうした状況に起因する内政・外交両面の大きな不満を重々承知しながら、これほどまでに強力な監視体制と国家暴力のもとでは、民衆が立ち上がって、ましてや政権を倒すことなど夢のまた夢ではあるまいか……地域研究者だけでなく、当事者であるアラブ市民も多くはそう思っていた。年が明けてチュニジアの権力者があっけなく逃亡し（もっとも本人は、国民の怒りの矛先をそらすために、国外に一時退避しただけのつもりだったらしい）、アラブ全体が恐怖の呪縛を解かれるまでは。

シーダー
SEEDer 6号
（2012年3月刊行予定）

【次号予告】

境域の北ユーラシア

北ユーラシア（旧ソ連東欧社会主義圏とその隣接地域）における国境を越えた環境問題を、西はドナウ川から東はアムール・オホーツクに至るまで、現状と歴史の両面から掘り下げて紹介する。また福島原発問題を受けて、25年前にやはり北ユーラシアで起こったチェルノブイリ事故の現地から日本へ向けたメッセージも収録予定。

SEEDer News

本誌4号で紹介した「海洋生物センサス」プロジェクトを主導した海洋センサス科学推進委員会が、2011年花の万博記念「コスモス国際賞」を受賞し、10月18日、その授賞式がおこなわれました。本受賞は世界80以上の国や地域がネットワークを組み2000年から10年間実施された大規模海洋生物調査「海洋生物センサス」の多大な成果が評価されたものです。

シーダー
地域環境情報から考える地球の未来

2011年12月5日発行

編集：『シーダー』編集委員会（編集長 秋道智彌）
事務局：人間文化研究機構 総合地球環境学研究所
発行：株式会社昭和堂
〒606-8224 京都市左京区北白川京大農学部前
TEL：075-706-8818／FAX：075-706-8878
編集協力：E 石川泰子 D 見聞社
表紙イラスト：いざわ直子

印刷：サンエムカラー

©2011『シーダー』編集委員会ほか
Printed in Japan
ISBN978-4-8122-1153-3 C3400

編集後記

『SEEDer』5号をお届けします。今回は村松伸さんを中心に都市をテーマとして取り上げていただきました。都市を測る・計る・可視化するとはどういうことか？ バーズアイ的な視点と虫の目でみる視点とでは地域や環境の捉えかたが大きく異なるでしょう。本特集は建造物、地上・地下環境、災害リスク、生物多様性、貧困を切り口として都市の問題に迫ったものです。宇宙ステーションから見た地球の夜景をテレビ番組でみたことがあります。そのことが可能となったのも21世紀における人類の技術と英知の成果にほかなりません。大きな光のかたまりは間違いなく都市のものです。今回の震災後、東北から明かりが消え、東京をはじめ多くの地域で節電の指令がありました。その結果、光の海はすこし減衰しました。光から都市のエネルギー問題を探る試みにもぜひとも挑戦したいものです。同時に、一人一人の人間の生きざまにも光を当てる視点だけは忘れたくないと思いました。（秋道智彌）

「地球・環境・情報ネットワーク」プロジェクト参加組織紹介（一覧）

北海道大学	（北方生物圏フィールド科学センター・スラブ研究センター）
公立はこだて未来大学	（共同研究センター）
東北大学	（東北アジア研究センター・大学院生命科学研究科・大学院農学研究科付属複合生態フィールド教育研究センター）
筑波大学	（下田臨海実験センター）
青山学院大学	（文学部）
北里大学	（獣医学部）
東京大学	（東洋文化研究所・空間情報科学研究センター）
東京外国語大学	（アジア・アフリカ言語文化研究所）
東京農業大学	（食と農の博物館）
早稲田大学	（アジア研究機構）
神奈川大学	（国際常民文化研究機構）
東海大学	（沖縄地域研究センター・海洋学部）
信州大学	（山岳科学総合研究所）
金沢大学	（環日本海域環境研究センター・フロンティアサイエンス機構）
総合地球環境学研究所	
京都大学	（フィールド科学教育研究センター瀬戸臨海実験所・東南アジア研究所・地域研究統合情報センター）
兵庫県立人と自然の博物館	
島根大学	（汽水域研究センター）
愛媛大学	（沿岸環境科学研究センター）
九州大学	（大学院農学研究院）
大分大学	（情報基盤センター）
立命館アジア太平洋大学	（立命館アジア太平洋研究センター）
宮崎大学	（産学・地域連携センター）
鹿児島大学	（多島圏研究センター）
琉球大学	（熱帯生物圏研究センター）